

横浜三溪園春季茶会 第十二回

主催 横浜中央茶道会

後援 横浜茶館・横浜文化教室

協力 有隣堂カルチャーセンター（戸塚）

カルチャーセンター・アグリ（上大岡）

清水康益社サバスホール（港南中央）

参加 横浜創英中学高等学校（卒業生含む）

横浜市立六ッ川中学校

支援 横浜中央茶道会海老名支部

横浜中央茶道会沼津社中

提供 生花 横山フラワーセンター

菓子 馬車道松むら

懐石料理 大蔵（ザ ニューオオクラ）

茶会記

時 令和二年三月二十二日（日）

於 横浜三溪園 主 内宛

従 白雲邸 小応接室 寄付（総合受付）

待合室 展観席（飾付）

談話室 懐石席（茶・懐石・御酒・菓子）

一・二の間 立礼席（薄茶）

春草蘆 広間 閑香席（閑香・主菓子）

三畳台目 本席（濃茶）

月華殿 檜扇の間 学生席（風炉薄茶）

竹の間 中学席（炉薄茶）

蓮華院 広間 茶籠席（茶箱・薄茶）

奉公 横浜中央茶道会

会長 乾信治（宗實・實道・實斎）

開始 受付 十時開始 閑香席 十時三十分

各席 濃茶席・中学席 十一時から

懐石席 十一時

終了 受付 十四時三十分 全席 十五時終了

各席満席（芳名録子約含む）時、受付終了

ご案内

本日は、当会大寄せ茶会にご参集頂きまして、誠にありがとうございます。左記に当茶会のご案内を申し上げます。ご不明な点がございましたら、総合受付あるいは各席に關しましては席受付担当にてお願い致します。

特に、会長に御用があります方は、本年は白雲師懷石席にてご挨拶申し上げます。

各席、特に一般で言う席主を設けておりませんが（講師披露席除く）、進行上、最低限に必要な会話ならびに簡単な説明（席により異なる）のみ実施しております（席により、語り部・介添役・解説役により会話する場合あり）。尚、屋礼内容は、本茶會記載にてご参照をお願い申し上げます。本年は、月華殿では実施はありません。

席予約は、各席芳名録方式を実施、芳名録に記名（姓名共）、茶券確認消込（単品券は受取）、整理券をお受け取り願います。各席ご予約は各10名様迄（春草蘆木名四名様迄）、ご予約の方は、開始時間五分前迄にお戻り願います。なお、定刻になりましたらキャンセル待ちの方をお並び順にて入室となり、予約は無効になりますのでご注意ください（2度の予約はできません）。なお、点前人の関係者を優先しており、開会時間前に埋めさせて頂く事ご容赦願います。

懷石席は、入室順（満席の場合はお並び順）、懷石券回収方式です。点心（弁当）では無く、茶懷石です。お持ちは帰りできません（菓子（消費期限当日）を除く）。

お酒が振舞われ、お代りできます。ご飯は、本年は、奉仕者による替椀方式でのお代りです。汁替有り、箸洗い（吸い物）後、強肴・酒、最後に主菓子で締めとなります。湯が必要な方は、用意ございます、ご請求願います。品書き参照の上、食物アレルギー方は、ご注意を願います。

※アルコールは、お車の方・未成年者の方には提供できません。

御菓子は、本茶会主菓子を濃茶前席（聞香席）、干菓子を各薄茶席にて、懷石席にて饅頭をそれぞれ、お出し致します

白雲師は、入口にて茶券を確認いたしますのでご用意をお願いいたします。

濃茶席の入席は、（流派を問わず）茶道経験者（及びその同伴者）に限りです。

※但し、点前人（或いは半東、席主）の関係者は、是非ご参加願います（その方には半東より頂き方説明いたしますのでご安心願います）。なお、作法上の消耗いたします懐紙は用意させて頂きませんが、ご自身の流派作法で頂戴頂ければ幸いです。

撮影は、点前中は点前人の関係者のみ可能。人物が映らない席室礼は任意です。

広間には、賞盆をお出しさせて頂いておりますが、全席禁煙です。なお、席内に限らず三溪園園内施設自体、禁煙です。喫煙は、園内所定の場所にてお願い致します。

荷物預り処（クローク）は、設けてございません。手荷物ならびに貴重品は、自己管理にてお願い致します。

令和二年三月二十二日 当日配布版

※訂正あります場合、後日にネットにて公開いたします

展観席（白雲邸）

本年は、「古典遊技具其之二」の飾りです。

日本伝統古典遊技

『歌留多』を中心に飾ります。

歌留多は、合せ物遊戯の一つとして起源を持つ平安時代の二枚貝の貝殻をあわせる遊び「貝覆い（貝合せ）」がある（語源を含め、札遊戯の起源は、古く中国から伝わった博打遊びのかり樽蒲（かりた・ちよぼ）からきたという説もある）。

ポルトガルよりカードゲーム「Catta」（日本では「天正かるた」と言う。）が伝来され、庶民文化が花開く元禄文明の時に大きく発展をした。大きく二大分類に分かれ、一つが「花札」系列もう一つが「歌留多」系列である。本年は、「歌留多」系列のものを展示いたします。

- 一 小倉百人一首 手書き 変態かな 江戸期
- 一 小倉百人一首 手刷り 変態かな 松井天狗堂
- 一 小倉百人一首 光琳絵 変態かな 大石天狗堂
- 一 競技用百人一首 公認日本かるた協会
- 一 源氏歌歌留多 変態かな 大石天狗堂
- 一 越中万葉歌留多 高岡市教育委員会
- 一 明治天皇歌歌留多 時代花

花

宗全籠 煤竹

季節の花

野点

総合受付入口には、目印の意味で野点傘を設置いたします。

（用華殿正面にも設置いたします）。

但し、雨天時（小雨中止）・強風時は、野点傘中止です。

結界 焼杉

沙江作

懐石席（白雲邸） 茶懐石一汁二菜

前茶 桜茶

飯 白御飯

汁 白味噌仕立て

蓬麩オランダ、細根大根、梅麩、水辛子

向付 鯛切り重ね

菜の花、たらの芽

山葵、梅肉醬油

煮物椀 海老葛打ち、小袖玉子、梅花芋

梅花人参、梅花椎茸、軸菜、柚子

箸洗 若竹、木の芽

奉公 大蔵（ニューオオクラ）

替汁

飯次

略八寸 強肴と酒

ほうじ茶 ※お酒が飲めない方限定

湯斗 ※必要な方ご請求ください

菓子 馬車道饅頭 松むら

桜茶 塩漬桜 松むら

御酒

酒 而妙斎御銘純米大吟醸「松の翠」超特選 山本本家

銚子 古銅菊水文様 他

飾り

花見弁当箆筒 漆器 蒔絵菊草花 時代

花見弁当重箱 大正

盃飾り 九谷庄三 農耕之図 時代

盃洗 時代窓抜遊興山水図蒔絵盃洗一对

同台 山水図蒔絵 時代

聞香席（春草蘆・広間）

掛物 扇子 「千年碧」大徳寺瑞宝院前田晏道筆
香時計 如意棒型 時代

琵琶床 越前琵琶（四本弦） 時代

聞香具 桑三重香合 菊文様聞香炉 桑長盆 香七つ道具
香木 伽羅 松栄堂

苜盆 苜盆 春慶塗 時代

煙管 苜入附屬 時代

火入 時代
苜 小粹 日本たばこ産業

主菓子 「千支子」ねりきり 馬車道松むら
干菓子 金平糖 三種 緑寿庵清水
菓子器 御重箱 松風 短桜 明治
桜枝飾り

香煎茶 青紫蘇香煎 祇園 原了郭
茶碗 煎茶碗

濃茶席（春草廬・小間）

本席

掛物 「茶」 黄檗山万福寺第貳代住持木庵性瑠筆

花入 竹 稻束 宗林作

花 季節の花

香合 紅清鳥玄猪完四方大香合 桐鳳造

練香 梅の香

茶碗 鬼萩 割高台 清暁造

（茶入 中棗 茶碗飾り）

釜 裏整透木釜 時代

炉縁 桑

茶入 古瀬戸 肩付 衛鉄造

仕覆 利休梅

茶杓 「喫茶去」 宗篤作 大徳寺黄梅院小林太玄師箱書

茶碗 白萩 椀型 泥詩造

替 青萩 井戸型 清暁造

替 萩 吳記型 聖谷造

同 白萩 椀型 時代

仕舞 兎島萩 青志造

出帛紗 点前好み

水指 鬼樽 信楽 山口錠鉄作 時代

建水 苔入朱 無弔作

蓋置 竹 宗篤作 前大徳寺宝林寺福本積慶箱書

御濃茶 銘「橋立の昔」 猶有斎好 詰 上林春松

茶箱席 (蓮華院)

土間 飾物 「月」

花 季節の花

掛物 色紙「散りぬとも匂ほい残せ王可袖に後へ心餘おもいでにせむ」

前堀内宗完筆

花入 瓢箪籠

花 季節の花

香合 竜之図 時代

印香 紅梅 松栄堂

琵琶床 振出 大 古瀬戸

出袂紗 細丸鳳凰

釜 鉄瓶 時代

風炉 丸唐銅風炉 時代

風炉先 七宝透 木彫 時代

茶箱 蒔醬(キンマ) 計光作

茶筥筒・巾筒 桑・志野

丸盆 春慶塗

紙釜敷 五色

茶器 「稻舟」螺鈿蒔絵 平棗 時代

最上川のぼればくだる稻舟のいなにはあらずこの月ばかり

仕服 双龍紹巴

茶碗 白磁霰小茶碗 時代

替 三島小茶碗 時代

同 布目桜小茶碗 時代

仕舞 黄瀬戸小茶碗 時代

数茶碗 唐津焼 岩倉造

茶杓 象牙小茶杓 時代

仕服 双龍紹巴

茶筌 姫茶筌

建水 茶箱唐銅

茶巾台 志野 一耀作

洗瓶 唐銅 小渡り

苜盆 苜盆 猩齋好 摺漆 沙久作

煙管 如心齋好写 壺多 近谷清雲作

火入 車軸火入 惺齋好写 松楽造

干菓子 三食団子

菓子器 銘々皿 木彫り二種

御薄茶 銘「有慶の白」猶有齋好 詰 柳桜園

立礼席 (白雲邸)

掛物 彫物「富士登頂十牛図」 岳泉作

花入 一輪指し

花 季節の花

香炉 薩摩焼

敷物 自然木

脇床 硯

炭 大四方 十六羅漢図

釜 車軸釜 時代

水指 手桶水指 真塗

茶器 瀬戸 頭切 黒茶入 路辺造

茶杓 桐蒔絵 澁山作

茶碗 黒織部 沓型 喜兵衛造

替 「おく山」沓型 泥浦造

同 喰違 時代

仕舞 黒織部 時代

数茶碗 沓型

建水 曲建水 又三作

蓋置 流れ桜 喜多庄兵衛作

水次 唐銅薬缶 龍口芋型 時代

棚 扇面立礼卓而妙斎好写 河瀬一敬作

盆棚

苜盆 八角桐

火付 フライヤ材ZIPPO

巻苜入 大駒

銘々皿 海老蒔絵 丸五寸塗 時代

干菓子 和三盆 干支子

桜鳳瑞 (ほうずい)

御薄茶 銘「三日月の白」 詰 上林春松